＜１年間の取組＞

〈第３学年〉

１　学習のテーマ

３年間のテーマ

『発信・核・感謝』

今年度のテーマ

「One for all, αll for one」

２　１年間の取組の概要（右図参照）

今年度、第３学年を中心に、委員会活動の見直し、再編を提案、実行した。新しい委員会でどのようなことができるかを考えていった。委員長がそれぞれの委員会で提案・議論しようと考えたことをクラスで意見交換を行い、よりより委員会活動を模索していった。

４月の体育委員会での課題などを取り上げ、委員会活動に取り組んでいく視点をクラス全体で共有した。それが今年度のテーマ「One for all, αll for one」である。

６月以降の中央委員会、学校祭では、自分だけではなく、他の委員会、部門（学校祭における異学年グループ）のことを考えて取組を行った。

１０月からの国際交流作品展オンライン交流では、中国杭州市の小中一貫校と、自分たちの学校の取組や、授業中に作った作品などを紹介しあった。この活動を通して、他の人に英語で紹介するために、改めて自分達の取組を捉え直すことの大切さを学んだ。

月／学年	３年
４月	
	１年間の方針決め
５月	
６月	
	中央委員会
７月	
８月	
	学校祭に向けて
９月	学校祭（11 日、12 日）
	第１回Ｍｙ　Learning
１０月	
	国際交流作品展オンライン交流に向けて
１１月	国際交流作品展オンライン交流（22 日）
	第２回Ｍｙ　Learning（公開研究会）
１２月	国際交流作品展オンライン交流振り返り
１月	
	卒業レポート執筆
２月	口頭試問「Thesis Offence」（22 日）
３月	卒業文集作成
	第３回Ｍｙ　Learning

国際交流作品展オンライン交流における学びも踏まえながら、安居中学校での学びを「卒業レポート」という形で執筆していった。

①　卒業レポート執筆～卒業文集作成

国際交流作品展オンライン交流の振り返りをパソコンで作成し、クラス内での共有を終え、１月から卒業レポート執筆を行った。「序章」に始まり、生徒一人一人が安居中学校での学びを章立ててまとめていった。分量、執筆スピードには個人差があったが、生徒達は悪戦苦闘しながら自分の言葉で書き進めていった。２月２２日に、生徒達が執筆した卒業レポートについて口頭試問を行った。クラスの生徒を４つのグループに分け、本校教職員４名と教職大学院４名が面接官となり、生徒一人につき約１０分間の試問を２回行った。生徒達は、自分が書いたレポートに対して、自分の言葉で語っていた。

口頭試問が終わり、改めて卒業レポートを執筆することの意義を捉え直し、「自分にとっても、読む人にとってもプラスになる卒業レポートにする」というテーマを共通認識として、書き進めていった。その完成したものをもとに、第３回 My Learning を行った。生徒達の卒業レポート中における安居中学校での学びのタイトルは次のページにの通りである。

①　「準備が大事」「My Learning での学び」「３年間で気づいたこと変わったこと」
②　「軸」「リーダーとは」「学びの具現化」「授業での学び」
③　「自分を見直す」「弱さを認める」「好き・嫌いに左右されない」「自分を知る」「学ぶ」
④　「とにかくやること」「ポジティブに考えること」「リーダーをやって思ったこと」
⑤　「文化祭」「国際交流」「後輩に伝えたいこと」
⑥　「失敗してもいいから挑戦し続ける」「仲間を信じて共に学ぶ」「一つの目標に向かうようにする」
⑦　「リーダーをやる前の自分」「劇の部門長になって」「三年生の後期」
⑧　「部活」「勉強」
⑨　「“変わる“こと」「変わることのハードル」「変わるきっかけ」
⑩　「小学校との違い」「一年生と二年生の違い」「二年生との違い」
⑪　「これまでの経験」「気づき」
⑫　「こなすだけだった」「考えることの大切さ」「三年間をふまえて」
⑬　「まずは従うこと」「自分を知ること」「ためらわないこと」「捨てる覚悟をもつこと」
⑭　「文化祭」「My Learning（委員会）」「受験」
⑮　「委員長」「三年間の学び」「受験」
⑯　「中学校入学前、入学後の自分」「中学校を通して成長した自分」「今後への課題」
⑰　「自分の考え」事前の準備や計画の重要性」「受験を通して気づいたこと」
⑱　「部活を振り返って」「委員長の事」三年間の学校生活」
⑲　「立場が変わって･･･」「人と関わって･･･」「誇りに思う」

②　成果と課題

＜伊部雅之＞

今回の活動を通して、私は「見取ること」を学んだと言える。私は学年主任という立場である。学年主任としてどのように関わるかと、３年生の生徒にとっても、担任にとってプラスになるかいうことである。当然担任と打ち合わせをよく行った。ただそれだけではない。こんなことがあった。卒業レポートを書き進めていたわけであるが、生徒達はどこか目的意識が低く、執筆することに後ろ向きな雰囲気を私は感じていた。そこで、担任に了承を得て、次のように生徒達に話した。

「今あなたたちがやっていることは、とても大事なことなんです。ではなぜ大事なのか。あなたたちはあと約２ヶ月で卒業です。総合的な学習の時間もあと数えるほどしかないのです。でもまだ何時間かある。では限られた時間で何ができるか。それを考えていくためには、この振り返りからみんなの学びを共有して、それでもまだ足りない部分を出していく必要があるのです。あと卒業式をどんな式にするかを考えて、逆算して考えていくことも大事だ。」

すると、後日担任と次のような会話を交わした。

「あの話は、自分（担任）にも言ってるような気がしたんで、卒業式から逆算して考えてみることにしました。」

私は正直そこまでは思っていなかったが、結果的によかったと思っている。今クラスや担任がどのような状況であるかを「見取り」、そこからどのような関わりが良いかの最適解を探していくことの重要さに改めて気づくことができたと思っている。最適解を導き出すためには、様々な「見取り」が必要となってくるのである。これからもその時の置かれた立場で、意識していきたいと考える。

＜竹内恭平＞

今回の卒業レポートに執筆に当たって、これまでの My Learning と同様、ファシリテーションの手本を見せるつもりで様々な角度から質問し、19 人の学びを価値づけてきた。毎回、「この 19 人ならばもっとできる、どうすれば彼らの成長を促すことができるだろう」と、私自身も反省し学級経営を行ってきた。しかし、今冷静に振り返ると書いている内容の質・量もそうだが、これまでの学びを点としてとらえるのではなく、繋がったものとしてまとめている生徒も多く、成長を感じている。彼らの中には、こういった内省する作業は面倒だと忌避する人もいて、一見すると格好つけた内容になっていて行動が伴っていないと考えることもできるが、物事を深く考える力と視点は確実に養われているのだろうと思う。レポートの口頭試問ということで「Thesis Offense」を行い、ある種強制的にしっかり取り組まなければならない状況を作ることになった。生徒の課題意識を出発点として学年主任との話し合いの中で活動が形作られていった。

卒業レポート執筆の出発点としては、ゴール＝卒業式 を見据えて、「やり切る」ということと、「後輩・安居中学校にメッセージを残す」というものだったため、相手に伝わるメッセージ性を重視して執筆が始まった。口頭試問自体の目的が、誇りを持って自分の学びを語り、質疑応答することで執筆に当たっての多角的な視野を獲得

するというものであった。中間報告の意味合いが強い口頭試問ではあったが、教職大学院の先生方にも確実に届いたものがあることから、改めて「相手に伝える」ことを再確認し、レポートの推敲に入った。

このように、生徒たちの現状を的確に捉え、教師集団として共通理解を図りながら、当初の見通しが、その時の見取りにより変わっていきながら進んでいった。そうして、教師の見通しから、生徒への返し方も変わってくるし、それにより学びの質も違うものになると考える。

＜田村雅彦＞

２年時のはじめの頃は、集団の中でちょっかいやじゃれ合いがみられ、お互いの信頼関係はどうなのかと疑問に感じた。幼いころからいっしょに学校生活を送る中で、お互いを理解した人間関係ができていると感じるところとそうでないと感じるところがあった。

変化を感じたのは立志式に向けた準備が始まってからである。昨年の先輩の迫力ある立志式（飛躍の会）にあこがれ、「今度は自分たちの番」という意識をみんなが持つようになり、一人一人が力強く決意を述べるなど、集団としての成長を感じる立志式（流星の集い）となった。

３年生になると修学旅行に向け、意識が高まった。まず、各自がやらなければならないことは何か、一人一人しっかり考えて活動する姿が見られるようになった。私は残念ながら修学旅行には行けなかったが、生徒の話や感想、写真の表情から、きっと最高の思い出を手に入れたことと思う。学校祭や委員会等でも昨年の３年生を超えようと、それぞれが目標を持ち、最高学年として皆をリードする姿をだんだんと頼もしく感じるようになった。

年３回のマイラーニング。体育館で話し始めるまでは緊張感のある面持ちで「どうしよう。大丈夫かな。胃が痛い。」など不安を口にする生徒もいたが、いざ始まると別人のようにしっかりと自分の成長、思いを語っていた。いろいろな活動でファシリテーターを体験したことも個々の成長につながった。集団としても状況をとらえ周囲に気を遣い、声を掛け合う姿も見られるようになった。

学年主任と担任がよく話し合って学年の方針、経営を共有していた。生徒を信じ、これは難しい、無理だと否定せず「やってみよう。やらせてみよう。」、これが学年のポリシーだったと思う。そして「厳しい指導と温かい支援」の積み重ねで生徒が成長していく姿を見ることは、今までにない大きな学びであった。私は２年間副担任として、表立ったことは何もできなかったが、学年教員や生徒からの教えに感謝したい。

コロナ禍の２年間。いろいろなことに制限があるなか、１９人の小さな集団は時には言い合いやトラブルを経験しながら多くを学び、大きく育ってきた。小学校から変化のない同じ学年の仲間。少ない集団だからこそ、教員が気づかない、生徒自身も気づかない深い絆があるのであろう。これは安居地区の強みと感じる。これからの人生、いろいろな困難や苦労が待ち受けている。そんなとき安居中でのがんばりを思い出し、仲間と支え合いながら今後も生きていく、そんな安居中の卒業生となることを期待している。

＜甲斐亜裕美＞

今年度、初めて学年に加わり、学年の様々な活動に参加することができた。この学年 My Learning では、生徒の卒業レポートについての口頭試問で、質問者として生徒に対することになった。生徒のこれまでの学びが書かれたレポートを事前に読み、その内容について質問を行っていったのだが、それに対する生徒の返しには驚かされることが多かった。質問者として、私の他に大学院の先生もいらっしゃったが、その鋭い指摘や難しい質問に対して、自分の言葉で思いを伝えようとしている姿に、これまでの学びがしっかりと生徒たちの中に残っているのを感じた。11 月の My Learning の前にも何名かの生徒の話を聞くことができたが、その時以上に自分の思いを伝えることが上手くなっていた。生徒たちはこのような活動を通して、これまでの経験から様々なことを学び、今後どのような自分でありたいかを考えることができたのではないかと感じた。今回、私はこのような生徒たちの姿を直に感じて、自分自身が学ぶことが多くあり、大変貴重な経験となった。